



さかきばら せつこ

東京都生まれ。米国マウン
ト・ホリヨーク大学を経て、
国際基督教大学卒業後、
国際会議同時通訳者に。そ
の後、大手証券会社にて医
薬品・バイオ企業間の企業
買収等に携わり、1991年、
アルペロサクロ(株)を設立。
国際的視野に立ったファイ
ンシャルアドバイザー・ライ

フスタイルアドバイザーとして、資産継承、金銭教育等を
テーマに活躍中。近著『凜としたシニア』など著書多数。

<http://www2.odn.ne.jp/sakakibara/>

ライフプランは「95歳まで」で考えよう

年を取ることは実は素敵なこと——資産継承・金銭教育に詳しいライフスタイルアドバイザー・榊原節子氏が、幸せに年を重ねるためのヒントを示す。

日本人の平均寿命は男七九歳、女八六歳。これは生まれた赤ちゃんの平均余命で、六〇歳になった人の場合は平均で男は八二・五歳、女は八八歳まで生きます。共に六〇歳の夫婦どちらかが九五歳まで生存する確率は二五%、「……だから老後の資金を考える際は九五歳までのプランニングを頭に置いておきましょう」と申し上げると、皆さん一様にドキッとした表情になります。

「年金に対する不安」は世界的傾向で、優雅なリタイア生活を送れるのはほんの一握りの人。多くの人は働き続けなければなりません。もっとも、仕事は収入確保だけでなく、

「自分の役割が保てる」「多くの人と交流できる」など、ハッピーエイジングにかえて資産するという考えが最近では優勢になってきています。状況にもよりますが、自営業、弁護士や会計士等の専門職、芸術家、農家などが有利になりそうです。

資産運用会社のフィデリ

テイの調査では、退職までに貯めた資金額に満足している日本人は一六%のみ。そうかといって資産を生活費のため取り崩すことには六八%が「抵抗がある」と回答しています。日本人は老後の資金に大きな不安を抱えながら、ひたすら年金をあてにし、その範囲内での切り詰めた生活を考えているようです。

なかには多額の資産がありながらどうしても収入内での切り詰めた生活しかできない人もいます。あまりに節約術を磨きすぎて、残りわずかな人生のだから世界中旅行したい、他人のためにも使って喜んでもらいたいと頭では思うのに、どうしても財布の紐を緩ませることができません。そういう人には清水の舞台から飛び降りるつもりでお金を使う、そんなトレーニングが必要になります。

貯蓄から投資へ

他方、米国ではリタイア後に生活レベルを下げると大きなストレスがかかるからと、むしろ資産運用に励んで収入アップを

図ることを推奨するアドバイザーが多いように思えます。日本人は一般的に不安症なのでしょうか、思い描く老後生活は緊縮志向といえます。

ハートフォード生命の国際的調査によると、退職後の備えに不安を感じつつも対策を講じていない理由として、日本は「資産形成に対する自信のなさ」が六九%でダントツとなっていて、米国四七%、英国二七%、ドイツ三〇%、さらに四四%が「資産形成についてのアドバイスをどこに求めてよいかわからない」と答えています。日本で老後の資金不安が顕著なのは、こうした現実がその背景にあるようです。

今回の金融危機で欧米諸国の自信にもかげりが出てきたかもしれせん。これまで諸外国から散々カモにされ続けてきた日本人。九五歳までのハッピーエイジングの原資となるお金の知識はしっかり身につけておき、このあたりで金融オンチの汚名を返上したいものです。長期的には「貯蓄から投資へ」の流れは変わらないでしょうから。◆